

---

# 桜花の庭より

asaghi

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桜花の庭より

### 【Nコード】

N1925M

### 【作者名】

asaghi

### 【あらすじ】

友人の家に、頼みごとを携えて訪ねて来た彼は、そこで、不思議な体験をする。それは、幻か、それとも、・・・真実なのか。

旧い友人の邸宅の前で、彼は牛車を停めて、降りた。

幸いに、如月の寒風の中、自宅を出がけには怪しく思えた天候も、今はまずまずの小康状態を保っている。これで細雪でもちらつこうものなら、彼はますます自分自身を惨めに思つたろう。

（疾く速やかに、あいつを、俺の長年の友人を、宮中に連れて来い、か。）

己を叱咤激励する為に、彼は、自分の役目を、もう一度、口の中で繰り返し、友の家の様子を、そつと、伺った。留守では、無いようだ。

主の開放的な性格を反映してか、正面門は開き加減である。しかし、それで無用心だと思ふほど、彼はこの家の主に関する知識が無いわけでは無い。また、最近、腕が落ちたという話を聞いて本気にするほど、疎遠では無かった。とんでもない。

準備は十分だと自分でも確認したと言うのに、もう一度、烏帽子を直して見る。

持参して来た物も、確認した時、少しく笑みが零れた。

土産を持たずに、他人の家を訪ねるのは、例え旧知の間柄とは言え、どちらかと言えば、避けたいものだ。

案内も乞わずに、初めて訪れる人の家の門を潜るのに等しい。

最前から、日雀が啼き交わす梅の枝の下を、清冽な匂いに取り巻かれながら、灘の清酒の土産を提げた手が、くすぐったいような思いに、彼は捉われていた。これでは、正式な依頼だからとあえて身に付けて来た衣冠束帯の内側まで、知らず、自然の内に焚き込めた香で匂いそうだ。

梅の匂いとはまた乙など、友人の笑顔まで先回りして、思い浮かぶようだ。とも思う。

扁額が掲げられていないのを、ふと不思議に思う、古式ゆかしい

木の門は、内側に向けて扉が開かれていた。

萌えかけた、灌木の新芽が眩しい。また、鳥の声がした。今度は、少し長い。

思わず、上を見上げる。表札は代わっておらぬ、当たり前的事だが。

文字は当然、本人の筆だろう。求めれば、書の名人にだって書いて貰えるだろうに。

どうも、とんと出世に興味の無さそうな友人への同情とも憧れともつかぬ、感情が、僅かに彼の胸を突き上げた。

いや、それも、この季節特有の何やら落ち着かぬ、言い知れぬ、一種の感傷か。

あえて、彼は両足を踏ん張るようにして、雑司が呆氣に取られようと構わぬ思いで、扉の内側へと声をかけた。

『ごめん。たのもう。』

その声に応えて、いつもの案内役が出て来る頃、そう言えば、落の臺が出てくる時期だろうと、いらぬ心配を彼はしているのだった。

思えば、自分の家は何だろう。彼は思う。

頼まれた用事を果たす前に、これは一度、考えて見た方が良いのでは無いか。

撰関家と言われる家に生まれ、家の為、自分の為と、がむしゃらに生きて来た。それを是と教えられ、また、その通りにもして来た。利する所はとらえ、欲せざる所は捨てて来た。

だが、もしも、すべての人々が、そうしたら、どうなるのだろうか。それを思うと、足元が、ぐらりと揺らぐような気さえするのだ。

誰もがうらやむ高みに居ながら、彼は、底知れぬ深奥を見下ろし、また、深奥のそのまた底辺から吹き上げる冷たい風を、高貴な血を持つと呼ばれるその身体の面に浴びたような気がした。

風の中から、声が聞こえたような気がしないか。

怨む声。憎む声を。

何故、お前は生きていると、そう問う声を、聞いた気がしないか。  
冷たい風、血なまぐさい風の中から。

「若様？」

静かに歩を宮中の祭事に勤める神官さながら、進めて来た案内役が、烏帽子の下形の形良い眉を僅かにひそめ、こちらを見ているのに気が付いて、彼は、ばつが悪い思いをしながら、我に返った。

今はそれ所ではない。

用件を果たさなくては。

用件。。。。彼にとっては主筋でもあり大叔母に当たる、ある高貴な貴婦人の依頼。。。。

（夢見が悪いからと、俺を呼び出さなくても良いだろう。）

梅の匂いが廊下に漂う。主の事が、ふと心配になった。

まさか、この季節に、濡れ縁で梅見と洒落込んでもいいまいが、いや、いないと信じたいが、しかし。

（あの通りの変人だからな。）

いや、変人への依頼ではない。実際、時の帝より信頼されているのは、この度依頼に及ぶ（予定の）彼ではなく、この家の主人であると断定しても過言では無く、現に彼は此处にいるではないか。

こうして。

殊更。己の立場に誇りを持たんとして、胸を張り加減にしたその時。

鶯が鳴いた。丁度、左手に薰り高い白梅の枝が、小さく揺れているのが見える。

同時に、彼は溜息を付いた。

こんな日にお役目などと、つくづく、嫌になる。その上、ただでさえ、人一倍“聡い”事で有名な男に、なんなら、おべんちゃらの一つも言って、重い腰を上げさせようと言っただから。

『友よ。宮仕えとは、何なのだろうな。』

「どうぞ。こちらです。」

しなやかな拳措動作で。広い座敷の奥を、案内役が、袖を掲げるようにして、指し示した。白い指が指し示すその方向に。

ほぼ予測していた事だが。

この家の主が、座っていた。ただし、彼からは背を向けた格好、開いた障子の向こう、濡れ縁から、やはり、外を見ていた。

（雲が切れている。）

陽射しが、几帳にかけた絹の如く、蒼い空から、ふわりふわりと、その両肩に差し込んで、ほつれ気的一本も無い、見事な頭の形を丁度浮き彫りにしている。顎から耳の線は見えるのに、表情は陰になつて、見えない。

構わず、勝手知つたる知己の家と言わんばかりに、一步踏み込んだ。

「おい。しばらくだな。どうしていた？せ・・・。」  
その時。

桜の花弁が、舞った。

一片。はらはらと、香の風を纏つて。

言葉に詰まつて立ち尽くした彼の周囲を。

此处が、屋敷内であると忘れた風景が、取り囲む。

満開の、一面の桜の巨木の群れ。青空に、一重八重、十重に二十重に、咲いて重なり合い、弥生の春風に枝を揺らす。

（ああ。しまった。これは、花見の服装ではない。）

彼は、桜色になりかけた思考の片隅でそう思った。

直ぐ近くの緋色の枝の上で、山鳥が尾を揺らし、また、高い空の風の音がした。

深房春暖かならねど

花雨自然に来る

（訳：奥深い部屋にはまだ春はやって来ない。だが花は雨さな

がら、おのずと天から降る。）

若い女の透き通った声が、りん、とふいに響いた。

「ごお、と、強い風が吹いた。緋色の風が。彼の帽子と言わず、衣服の裾と言わず、花弁が乱した。幾百、幾千もの、桜の花弁が。」

「おい。」

澄んだ声が、彼に呼びかけた。濡れ縁の上で、友が彼を振り向いて、怪訝な顔を見せている。

紅梅が、花弁を鳥に啄ばませている。

「おい？」

彼は我に返った。と、同時に、身体が自然に進んで、いつもの通り、友の方へと歩いている。見ると、祭事の折りの様な格好をした案内役も、小首をかしげて、彼を見ていた。

（今のは、一体・・・？）

「どうした？その酒は？…早過ぎる花見の酒か？」

「まあ、そんな所だ。」

冗談には冗談で返す。と言うより、相変わらず、実に俊敏なまでに、賢い男だと、彼はそう思った。そんな所もまた、彼がこの友を大好きな理由なのだった。

だが。桜だ。

あれは、友の見ていた風景なのか、と、彼は自然に腑に落ちた。この当代一流の男の家で、彼は、友の家に張られた結界の内側だからこそ、見られる風景を、今日、たった今、見たのかも知れない。そして。桜が意味する所、とは・・・。

彼は、どつかと腰を下ろし、さて、どう切り出したものか、胸に思案を凝らしながら、口を開いた。手の中で、そんな彼を励ますように、たばん、と、酒が揺れる。

何処で焼いているのか、干魚の匂いがする。

「まさか、頼み事か？真剣な顔をしておるぞ。」

冷涼な顔に、自然笑みを浮かべながら、きつとこの男は、引き受けてくれる、そんな表情をしていた。

彼は、胸の中で、もう一度、溜息を付き、頭の何処かにまだ、残っている、桜の幻影を追い払った。

「実はな、晴明。宮中で、少々問題が起こった。」

「ほう。」

肯くその手に、もう杯を取っている。

「妖しの出来事だ。」

彼は言った。

「つまり。」

彼が言い募らんとするのを、白い掌が掌紋をこちらに向けて遮った。

「わかったよ。とにかく、初めから、順序だてて、この、安倍晴明に話して見よ。」

「おお。それでこそ、晴明。わしの友垣じゃ。」

彼は、当代一とされる陰陽師の底知れぬ輝きを湛えた瞳を見据えた。

「実はな……。」

と、膝を乗り出す。

窓の外で、鶯が、谷渡りの鳴き声を、梅園ばかりではなく、庭全体に響き渡らせていた、如月の午後の出来事であった。

だが。彼にして、その時、気が付かなかった事実がある。

ひょっとして、友人が自分を、“助けてくれた”のかも知れない、と思ったのは、それから、数日後の事であったのだった。



\*

T  
h  
e  
  
E  
n  
d  
  
\*

（後書き）

注：文中の詩は、嵯峨天皇の五言古詩。

訳文は、大岡信氏の訳を、参照させて頂きました。

（実は、登場人物二人とも、実在の人物です、と言うのは、此处だけの話。）

『抄伝 安倍晴明』 第一話。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1925m/>

---

桜花の庭より

2010年10月10日17時11分発行